



馬耳東風

所変われば品変わるというが、記念日もまた国によってまた地域によって様々である。ヴァレンタインデーはわが国では女性から男性へチョコレートを贈るというのが一般的になっているが、私がしばらく住んでいたメキシコでは、「愛と友情の日」と言い、プレゼントも女性からだけではなかった。そのメキシコで思い出すのは「死者の日」である。ラテンアメリカ諸国の祝日らしいが、特にメキシコで盛んで11月1～2日に盛大な祝祭が行われている。日本のお盆に当たるのであろうが、興味深いのは1日には子供の魂が、2日には大人の魂が戻る日と分けられていることである。したがって1日はお菓子を供え、2日はメスカル等のお酒が供えられる。「死者の日」には、家族や友人たちが集まり故人を偲んで語り合う。しかし決して湿っぽくなく、楽しく明るく祝うのがお盆と決定的に異なっている。墓地には死者の花とも呼ばれるマリーゴールド等で派手な装飾が施され、夜間にはマリアッチバンドを呼んで故人が好きだった曲を演奏させる人たちもいる。死者の日が近くなると氷砂糖で作られた骸骨のお菓子をよくプレゼントされた。メキシコでは2,000年以上前から祖先の骸骨を身近に飾る習慣があったというが、その影響であらうか、彼らの骸骨に対する態度はわれわれとは全く異なり親近感さえ抱いているように感じたものである。「お盆」と「死者の日」、どちらも死者を偲ぶ記念日であるが、その偲び方には大きな違いがある。

記念日の中でも「終戦記念日」は特別である。この名称に関しては異論があることは周知の通りである。植民地支配から独立を勝ち取った国には「独立記念日」があ

るが、わが国の場合は負けてしまったのだから具合が悪い。「終戦ではなく敗戦だろう、終戦というのはごまかした」という意見があるが、だからといって正直に「敗戦記念日」では「今度は負けずにガンバロウ」みたいな気にもなりかねない。終戦記念日の心は、もう二度と戦争はしませんということなのだから、「平和の日」とか「平和祈願の日」としてはどうだろうか。記念日は何も記念するばかりではなく祈念する日でもある。

祈念する日の代表格は「消毒の日」であらうか。宮崎県では2010年4月20日に端を発した口蹄疫により、約29万頭の家畜が殺処分されるという痛恨の出来事があった。このような悲劇を二度と繰り返さないため、毎月20日を「県内一斉消毒の日」と定め、畜産農家に消毒の徹底を呼びかけている。きわめて有意義で、宮崎県内だけにとどめておくのはもったいなく全国に広めたい「日」である。

ところで災害の多い日本ならではの記念日もある。9月1日の「防災の日」は1923年9月1日に発生した関東大震災にちなんで1960年に制定され、また阪神・淡路大震災（1995）の起きた1月17日は、「防災とボランティアの日」となっている。未曾有の犠牲者を出した東日本大震災（2011.3.11）では未だに復興は遅々として進まず仮設住宅住まいを余儀なくされている人たちが大勢いる。しかし一方では被災者に寄り添い、被災者の力になろうとする多くの人たちがいる。震災が起きた2011年暮れには、こうした人々の行為を象徴する漢字として「絆」が選ばれた。人と人との絆が次第に失われつつある今の時代、「絆」を2011年の代表漢字だけにとどめておくのはもったいない気がする。3月11日を「絆の日」とすることはできないものだろうか。（久）